

薄井 寛 著

JA総研 研究叢書 1

『2つの「油」が世界を変える

新たなステージに突入した世界穀物市場』

世界に大きな変化が生じつつあるとき、その方向を見定めるためには、時間的、空間的に十分な広がりをもった座標軸の中にその動きを位置づける必要があろう。今日、世界の食料・農業問題において生じつつある変化は、まさにそうした評価が必要な問題であるといえる。ただし、こうした広がりの中で観察する場合、あらゆる事象が視野に入ってしまい、かえってその動きの正しい評価が難しくなることもあり得る。複雑な事象を切り分け、何が重要な要素であるかを見極め、その動向を指し示す見識をもったガイドが不可欠であり、本書はまさにこうした役割を担うものであるといえる。

第1章および第2章は、それぞれ主要穀物および大豆について、第二次大戦後までの世界的な需給の変遷をみたものである。各国の戦略的な政策と戦争とのかかわりの中で、米国、欧州における農業生産、農産物需給が劇的な変化を遂げた様が描かれている。第3章においては、世界の2大勢力となった米国と欧州がそれぞれの戦後処理の過程で対立し、ガット、そしてWTOがその調整の場として形成されていく過程が述べられている。第4章では、それまで国家の陰に隠れ、静かに大きな力を蓄積していた「穀物メジャー」が、南米を舞台に新たな主役として登場する。アーサー・シュレジンジャーが警鐘を鳴らした「世界政府なき世界経済」の展開ともいえよう。第5

章では、表題である「2つの油」(大豆油とバイオ燃料)をめぐる各國政府、多国籍企業それぞれの思惑、世界経済への影響力が急速に拡大してきた中国の動向等が交錯する中で、世界の農産物市場が新たなステージに入ったこと、そのことのリスクへの警告が発せられている。

こうして、第1章から第5章においては国家と市場(巨大な多国籍企業)という大きな力がグローバリズムという流れの中で、世界の農産物市場を形成していく過程が描かれているが、第6章では、こうした巨大な流れに対抗していく力としての「市民の力」が中心的なテーマとなる。ここでは2つの提言がなされており、その一つが、ファーマーズマーケットのような、農家と市民を直接結ぶ地域における取組みであり、もう一つが、持続可能性、自然との調和といった価値観に立ち、「90億人の食料確保」のための研究・提言を行う国際的なシンクタンク(「新ローマクラブ」)の設置である。

地域における農家・市民の交流と世界的な研究機関の設置、という2つの提言は、一見かなりの距離があるかに見える。しかし、地域におけるほんの小さな取組みが、グローバル化に対抗する「ローカル化」の運動・価値観として、広がり、連帯し、国際的な「市民の力」として結集していくことが、国家と市場という巨大な力に対抗しうる力として期待されているものであろう。我々自身がこうした流れの形成に少しでも役立つ努力をしていくことが極めて重要なことをあらためて感じさせる1冊であった。

農山漁村文化協会 2010年2月

2,600円(税別) 634頁

(取締役基礎研究部長 原 弘平・

はらこうへい)